**№10　テーマ『人生の鉄則』**

**講話日2008年1月12日**

**皆さん、こんにちは。今日は今年第１回目のお話ですので、まずは新年あけましておめでとうございます。今年もどうぞよろしくお願いします。今日のテーマは、人生の鉄則ということで、人間が人生を生きていく上で外してはならない基本原則の内容のことをお話させていただきます。人間が人生を生きていく基本は、自分の人生の未来に目標、理想を掲げて、そして現実をその理想に近づけていくという生き方をしないと、幸せにならないし、また仕事においても成功することはないし、また能力も人間性も伸びるということはないです。まずは、その人生を生きる基本はどのように理想あるいは目標・目的をつくるのか、という話になるわけなんですけど、そのことについては去年最後のときにお話をさせていただきました。その目標とか理想というのを掲げて、その次にどうすれば目標・理想を実現することができるのか、というのが今日のお話なんです。目標・理想を持った人間がどのような生き方をしたら、確実に目標・理想を実現して、素晴らしい幸せな人生というものを手に入れることができるのか。その人生を生きていくための基本原則というのが、人生の鉄則というテーマです。**

**その基本原則というのは５項目あります。それを順次、お話をしていきたいと思います。第１原則ですけども、レジメを見ていただくと「自信と謙虚」と書いてあるんですけど、とにかく人生の舞台は社会ですよ。この社会の中で生きていくためにまず基本的に要求されるものは、他人から信頼され信用されるということなんですよ。他人から信頼され信用されなければ、仕事が成り立ちませんし、また生きること自体が難しくなります。そういう意味で人生の基本は、他人から信頼され他人から信用される自分をどうつくるか。というところに第１番目の生き方の基本というものを置かなければなりません。**

**他人から信頼され信用されるためには、どういう努力をしたら良いのか。それは、自信をつくるということなんです。それで、自信というのは自分で自分を信じるということを縮めて自信というんですけど。自分で自分を信じられないような人間を誰が信じてくれるのか、ということになりますので、まずは、その自信をつくるということが、社会の中で他人から信頼され信用されて生きていくということの、まず第１番目の課題だということになってきます。自信をつくるということを噛み砕いて言うならば、信じるに足る自己をつくる。これが自信をつくるということの噛み砕いた表現になるわけです。そういう意味で、まず仕事をする上でも自信がなかったら、お客さんから見て「頼りないな」と思われてしまったらもう一巻の終わりですので、自信を持って仕事していく、その上でも信じるに足る自己をつくるということは、非常に大事な課題だということです。**

**だけど、自信だけでは人生を生きていくことはできない。もちろん自信は大事なんですけども、自信と必ず裏と表についてなければならないものは、謙虚さ。謙虚さのない人間はまた信じられない。謙虚さのない人間というのは、社会においては軽蔑されてしまう。つまり、傲慢ということです。傲慢な人間ほど嫌な人間はいない。他人に嫌な思いをさせて、嫌われてしまったら仕事も成り立ちませんし、社会生活はできません。その意味で社会生活をしていく上で、自信と必ず裏と表についてなければならないものが謙虚さ。自信だけでは生きられないし、謙虚さだけでも生きられない。謙虚さだけでは弱さになってしまいます。自信と謙虚さが一対となって、初めて社会を生きる人間性ができるんだ、ということをまず抑えなければなりません。**

**そこで、自信と謙虚さが一対となっていると自覚していなければなりません。そのために、信じるに足る自己をつくる、自信をつくるためには、どうしたら良いのかということなんですけど、自信というのはなかなか難しい。本当に自信を持って仕事をしていくことは難しい。長年、仕事をしていらっしゃる熟練した職業人でも、なかなか自信というものを持ち続けることはできない。ついつい自信がぐらつくということをおっしゃいますし、会社のトップに立って経営しているようなトップリーダーでも、自信が持てないということで悩んでいらっしゃる方が非常に多いです。どうすれば、崩れのようのない確固たる自信というものを自分のものにすることができるのか。その基本原理をわきまえたならば、非常に大きな自分の生き方の支えになってくることになります。**

**まず自信をつくるためにはどうするか、どういう努力をしたら良いのかということなんですけど、自信というのが自然に命から湧いてくる状態にならないといけません。そういう状態にするためにはどうしたら良いのか。命から湧いてくるものというのは、基本的に命を構成している各要素が有機的に絡み合って、その相乗効果として出てくるというのが、構造なんです。命から湧いてくるというのは、相乗効果という力が働いて、命から湧いてくる。命を構成しているものが有機的に絡み合って、自信というものを湧き上がらせる働きをしているわけですけど、では命を構成しているものとは何なのか。人間の命はどういうものによって構成されているのか。人間の命とは、理性と感性と肉体という３つの要素が絡み合って、有機的に絡み合って、人間の命というものをつくっているわけです。そのように考えていくと、自信が命から湧いてくるという状態にしていこうと思ったら、まず我々は理性という観点から自信をつくるためにはどういう努力をしたら良いのか、また感性という観点から自信をつくるためにはどういう努力をしたら良いのか、また肉体という観点から自信をつくるためにはどうしたら良いのか、と考えていく。その３つの有機的な関わり合いができることにより、その人の個性的な自信というものが湧いてくる。そういう力が命に生まれてくるわけです。まず自信が湧いてくる人間になろうと思ったら、まずは理性、感性、肉体。**

**ということで、理性という観点から自信をつくろうと思ったらどうしたら良いのかを考えてみます。理性という観点から自信をつくろうと思ったら、どういう努力をしたら良いのか。多くの方々が、学校を卒業してしまうとついつい体験・経験に基づく自信だけで仕事をしてしまいやすいんですよ。学校を卒業すると学問との関わりを忘れてしまって、自分の体験・経験だけで、それを基礎にして仕事をしていくということになってしまいやすい。体験・経験というのは残念ながら個人的なものであって、体験・経験から出てくる自信というのは、残念ながら個の限界を超え難い。他人を本当に納得させる力というのは持ち難い。他人から信頼され信用されるという状態をつくっていかなければならないんですから、体験・経験に基づく自信だけで仕事をしていってしまうと、仕事は伸びません。限界が出てきますので、その人は力があっても、なかなか多くの人に認められるということがないので伸びません。仕事も広がっていきません。理性という観点から本当の自信をつくっていこうと思ったら、学問的知識が大事です。今やっている仕事に関わる学問的知識というのをたくさん吸収する努力をしないと、他人から信頼され信用されるという形で自分の自信がだんだんと高まっていく成長を遂げることができません。**

**なぜ、学問的知識が大事なのか。学問的知識の中にはもちろん技術も入っていますので、知識・技術を全部含めて一応知識と言っているわけです。学問的知識というものは、その時代に生きる人間であるならば、誰もがそうだと認めなければならないという根拠が明確に与えられているものです。これが多くの人から信頼され信用されるということの大きな力になるわけです。だから、その人の口から体験・経験に基づく話だけではなくて、学問的な根拠を持ったという話が出てくると、人はその人を信用する。これはよくテレビに出てくる人の話でもそうですが、普通の人が話している分には「へえ」と気軽な受け止め方で終わってしまうことが多いですが、大学の先生になると「なるほど。そうなんだ」と思ってしまって、何も疑うことなく無条件に信じてしまう。そういう傾向性が人間にはあるわけであります。それぐらい、学問的知識というものには無条件に人を信じさせる力というものがある。これを自分のものにしていかないと、多くの人から信頼され信用される自分というものをつくっていくことにはなりませんし、また学問的知識を吸収する努力は人間において絶対に崩れない自信をつくってくれる力になるわけです。体験・経験に基づく自信というのは個人的なものだから、他人の経験したことと自分の経験したことが違うと、自分の持っている体験的な自信がぐらついてしまう。そういう意味では、学問的知識というのは誰もがそうだと認めなければならないという根拠が明確に与えられているものだから、これを獲得する努力が社会的に他人から信頼され信用される、生きていく力というのを自分に与えてくれる。それがために、皆さん方も小学校からずっと学問的な知識を教えてもらったはずです。それは、社会皆から信頼され信用されて生きていくことができる社会人になるため。**

**なぜ、学問的知識を学校で教えてもらわないといけないのか。それは、他人から信頼され信用されないと、生きていけないから。仕事ができないから。皆で共通するものを自分がどれだけ持っているか、ということが皆から認められる力、条件になるわけです。そういう意味でも、学校で勉強するということは、社会人として生きていく力をつくってくれるということになっていくわけです。理性という観点から大事な人生を生き抜く、崩れようのない自信というものをつくる原理は、学問的知識。今自分がやっている仕事に関わる学問的知識をどれだけたくさん自分のものにしていくか。これが積み重ねられていくことによって、だんだんだんだん段々畑と申しましょうか、自信がだんだん積み重なっていって、そして自信が湧いてくるという構造になっています。**

**次は、感性。感じる力ですけど、感性という観点から自信をつくるためにはどうするか。感性=感じる力というのは、これは人間だけではなくて、あらゆる動植物が生きるための基本的な能力として持っているものです。感性というのは全生物に共通する生命の本質という基本的な力なんですけど、人間にまで命が進化してくると、だんだんと高度になってきまして、人間における感性というものを心と言われます。心も感じるものですから。心というものは人間しか持っていない感性の力であります。心とは何なのか。心というのは、意味と価値を感じる感性。そういう内容を持っているわけです。人間の本質を心と言われるわけですけども、なぜ感性というのは意味と価値を感じるのか。なぜ心というのは意味と価値を感じるのか。人間は意味を感じないとやる気にならない。価値や素晴らしさを感じないと命に火がつかない、燃えない。人間が人生を生きていくためには、意味と価値を感じることが根本の課題であって、意味を感じない、意味が分からないとやる気にならない。意味や価値を感じないと、その命が燃えてこない。意味や価値を感じないと、訳が分からない状態でやる気にもならないし、情熱も出てこない。心とは意味と価値を感じる感性である。意味と価値を感じる感性である心という感性を原理にして、人生を生き抜く力、自信をつくっていこうと思ったら、どういう努力をセントバーナードか。どういう努力をしないといけないか。**

**心は意味と価値を感じる感性なんですけども、人間が最高に意味や価値を感じたらどうなるか。「もう自分はこのためなら死んでも良い」という気持ちになるわけです。恋愛でも最高に燃えて、最高に相手を素晴らしいと思ったら、必ず「もう私は人のためになったら死んでも良いわ」という気持ちになっていくものなんです。最後に意味や価値を感じると、死んでも良いという思いが命から湧いてくるわけですよ。そういうものが人間の心なんですよ。それを原理にして人生を生き抜く力をつくっていくとは、どういうことなのか。自分の生き方を支えてくれる信念をつくるということを考えなければならない。信念を持った人間が、社会から信頼される。皆から信頼される。信念のない人間は、信用できないということで、仕事でもあまり尊敬されない。そういう意味で、自分の生き方を支える信念をつくるということを考えなければならない。信念というものは、ぐらつかないことを言うので、ぐらついている間はまだその人の信念は固まっていないということなのです。本当に信念を持っているということは、ぐらつかない原理を自分の中に持っているということが、信念を持っているということの意味、価値であります。では、ぐらつかない信念はどうしたらできるのか。誰がどう言おうと自分はこれで良いんだ、という信念はどうしたら持てるのか。**

**絶対にぐらつかない信念というのは、「このためになら自分は死ねる」、このためなら死んでも良いと思えるような意味や価値を感じるということができないと、ぐらつかない信念はできません。そのとき初めて、ぐらつかない信念というものが確立されるわけであります。ぐらつかない信念というものを確立しようと思ったら、今自分のやっている仕事の意味や価値や値打ちや素晴らしさを考えるんです。今自分のやっている仕事の意味や価値は値打ちや素晴らしさを考えていくと、他の仕事にはない独特の素晴らしさに気付きます。その醍醐味というか独特の素晴らしさというのに自分が気付く、感じると「もう自分はこの仕事でいい」「この仕事以外のことは考えない」と、腹が決まってくるわけです。それが分からないと、給料の良い方に行ってしまったり、他人がこちらの方が良いとなれば「そうだなあ」と思って、ぐらついてしまうんですよ。だけど、今自分のやっている仕事の本当の素晴らしさを感じた人間は動きません。「この仕事で生きて死んでいったら、もう自分は何も言うことはない。満足だ」というは気持ちになれるわけです。**

**プロと言える職業人というのは、今自分のやっている仕事に絶対の信念を持つ。この仕事がどんなに素晴らしいのか、ということを知っていないと、プロではない。今自分のやっている仕事の本当の素晴らしさに目覚めないと、ぐらつくんですよ。今自分のやっている仕事の本当の意味と価値と値打ちと素晴らしさに目覚めた人間はぐらつきません。悔いのない人生の生き方というのは、そこから出てくるわけです。そういう意味で、感性という観点から人生を生き抜く自信、他人から信頼され信用される、そういう自分をつくっていこうと思ったら、とにかく今自分がやっている仕事に対して、「このために生きて死ねたら本望だ」という気持ちをつくっていくことが大事であります。それが職業人の最高の姿です。そういう意味で、今自分のやっている仕事の意味や価値は値打ちや素晴らしさというものをとことん考えていくと、だんだんだんだん年を重ねるに従って、自信ができてくるわけです。信念を持って仕事をしている人というのは、お客さんから見ても信頼できる人。「大したものだな、すごいな」という気持ちをお客さんや周りの人が持ってくれる。そして信頼され信用されるという自分ができていくわけです。**

**とにかく、社会に出て金をもらって仕事をすることがプロですから、プロとしての仕事をする限りは、その金がもらえるだけの自分というものつくっていかなければならない。本当のプロというのは、今自分がやっている仕事の醍醐味、本当の素晴らしさというのを感じる。そのことになって初めてプロと言える。感じないと燃えない。意味と価値を感じたら命が燃える。意味と価値を感じたら命に火がつく。情熱が湧いてくる、やる気になってくる。感性という観点から自信をつくっていこうと思ったら、今自分のやっている仕事の中に素晴らしさを発見するという努力をする必要がある。素晴らしさや意味と価値はどこにあるのか、そういうことを考えていくとだんだんだんだん成長してきて、感性が意味を感じたとき命に火がつくという状態になって、やる気になって燃えてくる。そのようにして、感性という観点からの自信はつくることができるわけです。**

**最後は肉体です。肉体という観点から人生を生き抜く自信をつくろうと思ったらどうするか。肉体というものが持っている人生の価値は何なのか。それは体験であります。体験は肉体がなかったら体験できませんから、体験こそ肉体が持っている人生の価値だ。体験というのは、やった人間にしか分からないというものを与えてくれる。癌になった人間にしか、失敗した人間にしか、本当の気持ちは分からない。子どもを亡くした親の気持ちは、本当に自分の子どもが誘拐されて殺された体験がないと、その人の気持ちを分かることはできません。失敗した人間にしか、失敗した人間の本当の気持ちは分からない。体験なしには真実を語れない。真理というのは勉強していろんな知識を持てば語れますけども、真実というのは体験なしには語れない。本当のことは体験しないと分からない。人間は体験の数だけいろんな物事に対する理解を深めることができる。人間は体験の数だけいろんな人の気持ちを分かってあげることができる。体験の豊かさが人間性の豊かさ、心の豊かさをつくってくれる。その意味では体験にはマイナスがない。どんな体験も全部自分を成長させてくる。人を殺したこともない人間は人を殺した人間の気持ちは分かりませんから。だから人生はどんなことがあっても全てそれは自分を成長させてくれるプラスだ。体験がある限り、人生に絶望がない。体験の数だけに賢くなるんだ。体験の数だけ成長するんだ。体験の数だけいろんな人の気持ちが分かる自分になっていくことができるんだ。体験していない分だけ、まだ人間性が貧しいとなるわけです。**

**では、「人を殺さないといけないのか」という話になってきますが、決してそういうわけではない。人生においては毎日毎日、いろんな体験をしますので、それらをもっともっと大事にして、体験はいろんな人の気持ちが分かる自分をつくってくれるんだ、という意識で体験を見過ごさない。体験というものを粗末にしない。体験することによって自分は真実を語られる人間に成長できるんだ。このことを考えていくと、体験の数だけ人間は成長できるんですから、体験の数だけ真実を語ることができるんですから、どれだけ勉強していろんなことを知っていても、「行ってみたらこうなっていた」「やってみたらこうだった」と言われたら反論できませんから、認めざるを得ない。それだけ体験というのは理屈を超えたもの、有無を言わさないもの。体験ほど人生において強いものはない。いろんな体験、いろんな喜怒哀楽を味わい尽くして、世の中の酸いも甘いも味わい尽くす。それがいろんな人の気持ちを分かってあげることができる温かな心を持った人間に成長させてくれます。体験にはマイナスがない、どんなことがあっても人生は絶望がない。毎日体験の連続ですから。朝起きたらまた今日は新しい体験をしますので、また成長してしまう。どこまで成長するか分からなくなってしまう。毎日成長していくというのが、体験というものの価値であります。体験の積み重ねというのは、崩れようのない自信を自分でつくってくれる。体験というのは最初に申し上げたように、個人的なものなんですけど、だけど個人的なものでもさまざまな体験を積み重ねていくことによって、いろんな人の気持ちが分かってあげられる自分に成長していきますので、体験を積み重ねていくと人間はだんだんだんだんいろんな人の気持ちが分かって、いろんなことが理解できて、そして真実が語れる。そういう力がだんだん成長していきますので、体験を積み重ねていくということが自信を積み重ねていくことになっていきます。**

**とにかく、人間が自信というものを持って生きてく力というのは、今申し上げたような３つの原理でつくられていくわけです。理性という観点からは学問的知識、そして感性という観点からは信念。死んでも良いと思えるものを持って生きることが自信になる。肉体という観点からは体験の積み重ね。体験は真実を語る力。いろんな意味で真実というものを掴み取る、知るというは形で自信が積み重なっていく。そのことをちゃんとやっていくと、確実に他人から信頼され信用される自分ができていくわけであります。どの程度理性という観点からの学問的知識、どの程度感性という観点からの意味と価値と素晴らしさを感じる力をつくったか、どの程度肉体という観点からの自分の体験を大事にして、いろんな人の気持ちが分かる自分に成長してきたか。理性、感性、肉体の原理がどの程度成長しているかによって、その人の命から湧いてくる自信の度合いが決まるわけです。とにかく、自信のつくり方というのはその３つしかありませんので、３つのことを心に入れながら仕事をし、生活してもらいたいと思います。**

**そのように自信はつくれるんですけども、その次は、自信だけでは人生を生きられない。自信過剰になってしまうと傲慢になってしまう。傲慢な人間ほど醜いものはない。傲慢な人間ほど人から嫌われてしまうものははない。そういう意味で、自信を持った人間が次にしないといけないことは、謙虚さをつくるという仕事であります。謙虚な人間になる。謙虚な心をつくる。そのことを次に考えなければならない。だけど、謙虚さもいき過ぎてしまうと弱さになってしまったり、あまり謙虚になると媚びへつらうようなことになってしまう。だから、その反面に自信というものがないと謙虚さも醜くなるわけです。過ぎたるは及ばざるが如し、と言わんように、謙虚さも過ぎれば弱さになるし、媚びへつらいになるし、醜い。とは言え、やはり傲慢であってはならない。傲慢にはなれない自分というものをつくっていかないと、他人から信用され信頼され、他人から好かれるような社会を生き抜く力はできません。どうしたら謙虚さができるのかを考えていかなければならない。**

**謙虚さをつくる原理の一番根本になければならないものは、人間は不完全だということを分かっているか。本当に人間が完全ではない、不完全だということが分かったら、人間は自分にも優しくなれるし、他の人にも優しくなれる。人間は不完全だということを忘れてしまうと、人の短所を責めたり、他人に嫌なこと言ったりと、嫌われることになってしまうんですよ。そういう気持ちを持っていないと、社会において皆と仲良く生活し、生きていき、仕事をすることはできません。**

**不完全性の自覚ということ、この人間は不完全だということをもっともっと具体的に考えていくと、人間は長所も短所も半分ずつということになります。人間は誰でも長所も短所も半分ずつあるんだ。人間は誰でも他人から嫌われ、他人から非難され、他人から軽蔑されるところを半分は持っているんだ。短所がなくなってしまったら人間ではないんだ。短所があってこそ人間なんだ。短所はあって良いんだ。短所をなくす努力はしてはいけない。短所はなければならないんだ。そのことをちゃんと分かってくると、人間は優しくなります。寛大で大きな心を持って人と接することができます。これが分かっていないと、ちょっとしたことで人を責めたり、人を非難したり、人を軽蔑したりという醜い心がでてきてしまうんです。短所がなかったら人間ではない。人間は短所があってこそ人間だ。また人間の心の本質は心と言われますけど、人間らしい心というのは謙虚な心なんですよ。謙虚な心というものをつくってくれるのは長所ではなくて短所なんですよ。短所が人間の本質である謙虚な心をつくってくれる。短所をなくす努力をすると、傲慢になってしまうんですよ。短所をなくす努力をすると他人を軽蔑したり、非難したり、他人を責めるような醜い心を持った人間になってしまいます。だから、短所をなくす努力はしたらいけない。**

**どうすれば、謙虚な心が出てくるかというと、まずは誰でも長所も短所も半分ずつあって短所は半分あって、しかもなくならないんだ、ということを知る。だから、なくならない短所をなくす努力をさせることは、間違ったことだ。また自分においてもなくならない短所をなくす努力をすることは無駄な努力だ、ということをまずちゃんとおさえなければならない。だけども、「短所はあって良いんだ。短所を放っておいても良い」と、おおっぴらに放ったらかしにしているのも人間的ではない。人間であるならば、自分の短所はどこなのか、自分の長所はどこなのか、ということを知って初めて人間になるんだ。自分の短所を知らなければ、人間ではない。動物と同じ次元だ。動物も植物も短所があるんですけど、けれど自分の短所がどこで自分の長所はどこにあるのかを知らない。人間だけが自分の長所と短所を知ることができる。自分の短所を知ることによって、人間らしい謙虚な心ができるんだ。人間らしい心をつくろうと思ったら、まずは自分の短所がどこなのかを知る、ちゃんと言えるということが謙虚な心をつくっていくための基本原理であります。短所を知らない人間は、人間ではありません。短所をちゃんと分かってこそ人間だ。もちろん、長所もちゃんと分かって人間だ。長所短所は半分ずつありますから、だから短所が３つあれば、長所も３つ言えなければならない。それが人間のバランスというものなんです。とにかく、短所はなくならないのであって、短所がなかったら謙虚な心はできませんから、短所がなければならない。そして人間になるためには、自分の短所はここですと、ちゃんと言えなければならない。ちゃんと言える人間は傲慢にはなりません。まずはそうなることが、人間らしい心をつくっていくための基本原理です。**

**だけども、短所が出てきたら嫌われますから、あまり出てこないように注意をする。短所を人に言う場合でも、「君の短所はここなんだけど、それが出てくると皆に嫌われるから、あまり短所が出てこないように注意をしよう」と、言わなければなりません。だけども、短所をなくす努力はさせてはいけない。なぜなら、短所をなくす努力をさせるということは、人間ではなくなってしまうから。そして、他人の短所を発見したら、絶対に責めてはいけない。なくならないんだから。発見したら、短所は誰かに助けてもらう、補ってもらうためにあるものだから、助けてあげよう・助けてあげたい・助けてあげなければならないと思う心が人間らしい血の通った温かな心なんだ。短所を責める人間には、血の通った温かな心は存在しません。人間らしい心は存在しません。**

**人間は不完全だということを忘れてしまい、人間に完全性は求めてはいけない。人を責める人ほど醜いものはないですからね。自分が人を責めるときには、なんかが正しいことを言っているみたいに思っているんですけど、他人が人を責めている姿を横から見たら、「なんて嫌な奴だ」と思ってしまうはずなんですよ。それくらい人を責めるという人間の姿というのは、醜いですよ。国会でもお互いに揚げ足取りをしたり、人を責める快感に酔っていることが多い。国民から見たら「なんて嫌なやつだ」となるんですよ。あんな人間を尊敬できるか、と思うから皆、国会の議論を聞きながら政治家をバカにしているんですよ。人を責める人間ほど醜いものはない。人を責める心が病んだ心、病気なんですよ。**

**とにかく、短所というのはなければならない。短所は必要なんだ。謙虚になるために、人間になるために、不完全な人間になるために必要なんだ。人間は不完全なんだから短所がなかったら不完全になれませんからね。だから不完全な人間において短所は必要だ。短所が出てきたら嫌われるから短所は出てこないように注意しなければならないし、自分の短所はどこなのかということを知らないと人間になれない。ちゃんと自分の短所を言えなければならないし、自分の長所もちゃんと言えてはじめて人間としての生き方ができる。**

**他人の短所を発見したら責めてはいけない。助けてあげなければならない。そのために自分は長所を持っているんだと思わなければならない。人間は他人の短所を助けてあげるために自分の長所を磨かなければならない。自分を磨くのは威張るためではない。人の役に立つため。人の役に立つことは、人を助けてあげること。相手が持っていない力を自分が持って、人の役に立ってあげる。そのために長所を磨かなければならないんだ。長所を磨くのも愛だ。他人の役に立つために我々は長所を磨かなければならないんだ。長所を磨く努力も愛の努力なんだ。他人の短所を助けるために我々は自分の長所を磨いておかないといけない。**

**さらに大事なことは、自分の短所を隠さない。短所はあって当然なんだから、短所を隠さないで、短所をさらけ出す勇気を持って「助けてください」と謙虚に助けを求める。助けてもらったら「ありがとう」と感謝をして、相手を尊敬して恩を感じて、相手の素晴らしい能力を褒め称える。「本当にありがたかった」と、助けてくれた人を尊敬して感謝をする。自分の短所をさらけ出せないと助けてもらえません。自分の短所をさらけ出すというのは、相手の存在を輝かせる活人力なんだ。自分の短所をさらけ出すことができない人間は、人を輝かせることできない。人を生かすことができない。活人力は人を輝かせる力。人の能力を褒め称える、相手の存在を輝かせる力。**

**長所で人を助けてあげるだけでは相手を惨めにする。相手に劣等感を感じさせる。自分の短所をさらけ出すことで助けてもらって、初めて人間の価値がある。助けてあげることも立派だけど、助けてもらうことも立派なんだ。助けてあげることと助けてもらうことが両方あって、はじめて人間としての生き方ができる。本当に短所をさらけ出す勇気を持たないと、我々は人を輝かせて人を幸せにして良い気持ちにして、そして幸せに生きていくということができない。だけど、助けてもらうだけでは頼りないことになって、バカにされますので、何か１つぐらいはどんな人でも助けてあげることができるような素晴らしい力を磨いておかなければならない。そのために我々は長所を半分持っているんですよ。他人よりも素晴らしいところは、皆半分はあるんですよ。その半分もある長所の中の何か１つぐらいは、「あいつはすごいやつだ」と他人から一目置かれるような素晴らしいものを見つける・つくる努力をすることが、人生を楽しく愉快に、皆から尊敬されて、皆から褒められて生きていくことができる大事な努力目標です。何か１つぐらいは他人から一目置かれるもの持っていないと寂しい。それだけでは傲慢になってしまいますから、謙虚さをつくるためには自分の短所をさらけ出して助けてもらって「ありがとう」と言えなければならない。人に感謝しなければならない、恩を感じなければならない。そして人を褒め称えるということが無理なく素直にできるという自分をつくっていかないと、美しい心を持った人間にならない。本当に自分のダメなところを助けてもらえれば、誰でもありがたいと思いますから、助けてくれた人を褒め称えることができますよ。そのように謙虚さをつくっていくんです。**

**なぜ一体人間には長所と短所が半分ずつあると言うことができるのか。ほとんどの人は人間は不完全だから短所はあると知っていますが、それではダメだと思って短所をなくす努力をついうっかりしてしまうんですよ。短所が半分もあるとは考えていなくて、「ちょっとくらい短所はあるけど…」という風に思っている人が多いんですよ。だけど短所はちょっとどころではない、自分の持っているものの半分は短所なんだ。半分は長所だ。なぜそう考えなければならないのか。それは、人間も命の中に存在する１つの命であって、人間も一人ひとりが大宇宙の一部を占めているんです。我々も宇宙の一部なんですよ。我々も宇宙なんですよ。宇宙の中にいて、現実の宇宙の一部を担っているわけですよ。宇宙とは何なのか。マイナスに評価されるエネルギーとプラスに評価されエネルギーが、エネルギーバランスを模索しながら秩序をつくっている、というのが宇宙の摂理と言われています。宇宙とは、常にマイナスとプラスがお互いに協力し合いながらバランスを模索して、宇宙の秩序が崩壊しないように働いている。**

**この基本的な力を使って、宇宙は宇宙に存在するあらゆるものをクリエイトする。つくり出す。人間も宇宙の力によってつくり出された一個の命であります。基本的な原理というのは、プラスとマイナスがお互いにバランスを模索しながら調和をつくり、バランスを保っている。だから宇宙の中で存在するものは、常にバランスを模索する。調和とバランスを求めるという在り方をしている。宇宙に存在するものは、シンメトリーに近いようなバランスの取れた構造に命はなっています。人間だけではなくて、動植物全ての命の形は、シンメトリーになっていますし、栄養摂取も空腹満腹というバランスを取っている。神経系でも交感神経、副交感神経とバランスを取っている。バランスを取ろうと思ったら、相異なる原理があって、それが協力しながらバランスを取るということになっています。**

**だから宇宙に存在するものは全て対という構造になっているんですよ。プラスにはマイナスがあるし、陰には陽があるし、光には影があるし、善に悪があるし、美には醜、真には偽、清には濁、男には女、動物には植物、表には裏、と双方がないと存在はできないんですよ。常に社会には半分ずつあるんですよ。上には下、左には右、前には後。全部ちゃんと半分ずつ、一対になっているのが宇宙の姿なんですよ。だから人間も宇宙の力によってつくり出された存在ですから、自分の命は自分でつくったものではなくて、これは与えられたものですから、宇宙の力によってつくり出された命を与えられて我々は生きているわけですから。人間の命の中にも宇宙の摂理が働いている。だから、命にはプラスとマイナスが半分ずつある。だから、人間には長所も短所も半分ずつあるという構造になっているんだ、と考えなければならないということです。**

**人間誰でも必ず他人から見たら嫌だなと思える部分が自分の中には半分もあるんです。「かっこ良い人だな」と思って好きになっても、長く付き合っていたら、どんな好きな人でもどんな立派な人でも、必ず嫌だなと思う部分が半分は出てくるんですよ。人間を愛するということは不完全な存在を愛することですから、長所を愛せても短所は愛せないという人は、人間を愛する資格はないんだ。その人を愛すということは、その人の長所も短所も丸抱えで愛することであって、その人の短所を愛せない人はその人を愛することはできません。どんな立派な人でも長く付き合ったら必ず非難したくなるところ、いやなところ、軽蔑したくなるところが半分は出てくるんですよ。だから、世の中でどれだけ尊敬されている人でも、奥さんに聞いたら「あんな人、どこが立派なの？」となってくるんですよ。長く付き合ったら必ず嫌なところが半分でてくる。これは避けがたい宿命なんですよ。そのことが許せなかったら、人間付き合いは長続きしません。嫌だと思うところが半分あることが許せない人間は人間を愛する資格のない人間だ。**

**本当に人間を愛そうと思ったら、短所を許すことができる人間にならなければならない。短所はなくならないんだから、許すしかないんですよ。短所が許せて初めて人を愛する力が生まれてくる。短所を許す力が血の通った温かな心。短所が許せない人間には血の通った温かな心は存在しない、理性だけだ。短所が許せて初めて血の通った温かな心を持った謙虚な人間ということができる。だから人と付き合うときには、必ず長く付き合ったら自分が嫌だと思うところが半分出てくるんだ。それは避け難い、仕方がないんだ、それで良いんだ、それが人間なんだと分かっていないと、人間関係は長続きしませんし、本当に人を愛する力は生まれてきません。だけど、短所は半分あるということは、長所も半分あるんですよ。つまり、人から好かれる部分が半分あるんですよ。中には「こんなやつに長所なんかあるか」と言いたくなる人もいるんですが、それはなんなのかと言ったら、自分が相手の中にある長所、良いところを見つけ出す力がまだないんですよ。「こんな奴に長所なんかあるか」というのは、相手の責任ではない。それは自分の人間性が貧しい。だから相手の中にある良いところがなかなか見えてこないだけなんだ。どんな人でも他人より素晴らしいところを半分は持っているんだ。それが見えないということは、自分の責任だ。自分の人間性が未熟であって、自分の人間性が狭くて、自分の人間性が貧しいから、相手の良いところが見えないだけなんだ、と思っていないと、ついつい人を責めたくなってしまいます。たとえ、ホームレスの方とあった場合でも、必ずその人の中にも自分よりも素晴らしいところが半分はあるはずなんだと。まだ出てきていないけど、潜在能力としては必ずどんな人でも自分より素晴らしいところを半分は持っていらっしゃるはずなんだという思いで、その人を見つめなければならない。決して人を見下げたり、軽蔑したり、非難するような目で人に接してはいけない。それは醜い心だ。どんな人の中にも素晴らしいところが半分はあるということを意識しながら、その人を見つめなければならない。**

**また他人と接する場合には、相手から見たら必ず自分の中には嫌なところが半分はあるはずなんだ。そのことも忘れてはならない。そのことがちゃんと分かってくると、だんだんだんだんと謙虚な気持ちが湧いてくる。そういう謙虚さが滲み出てくるような人間性が出てきます。**

**不完全性の自覚というものをつくっていくための第２番目の原理は、理性という能力に対する考え方なんです。理性は合理的にしか考えることができないと書いてありますけども、これまでは理性能力というのは合理的に考えることができるすばらしい能力だ。理性は神から人間に与えられた完璧な能力なんだ。理性は完全だと思っている人が多かったんですよ。だから、理性は完全だ、人間は不完全だと。だから、人間は完全な理性に従わなければならない、理性で考えたことを実践できないとダメだと思ってきた。その結果、人間は理性に支配され、奴隷となって、人間らしい血の通った温かな心をなくしてしまったんですよ。だから、現在の人たちは皆理性的になってますから、自分と同じ考え方の人しか愛せない。考え方が違ったら好きになれない。同じ価値観の人間としか仕事ができない。価値観が違ったら一緒に仕事なんかできるはずがない、これが犠牲に支配され、奴隷となって人間ではなくなってしまった悲しい人間の姿です。**

**本当に血の通った温かな心を持った人間であったならば、考え方の違う人とどうしたら一緒にやっていけるんだろう、価値観の違う人とどうしたら一緒に仕事ができるんだろう、感じ方が違ってもどうしたら一緒に生活できるんだろう、宗教が違ってもどうしたら仲良くやっていけるんだろう…そのことを考え出したら、血の通った温かな心ができてくるんです。ほとんど今は、血の通った温かな心が見失われてしまって、理性だけで生きているという状態に近い人が多いわけです。これは学校で理性を成長させるという教育ばかり送ってきて、血の通った温かな心をつくる教育というのは学校にはないからです。残念ながら学校教育によって人間は人間性を破壊されてしまったんです。だから、人が許せない人間がたくさん出てきてしまったんですよ。国会でも責めて責めて責め抜いて、相手が困っているのを見て、ほくそ笑んでいるみたいな醜い人間性を持った国会議員がたくさんいます。ほとんどの人がそれに近い状態になってしまっているんだ。**

**だけど、ずっと近代人は何百年間と理性を信じて、理性は絶対だということで理性を信じて、いろんなことをやってきた。理性を信じて生きてきた結果、自然破壊・環境破壊・人間性の破壊・核廃棄物…という問題を人類はつくり出してしまった。そのことによって、本当にこれからも我々は理性を信じて生きていっても良いのか、という不安に今襲われているわけですよ。ようやく理性に対する絶対的信頼が揺らぎ始めたという状況に人類はあります。これを理性の揺らぎといいます。理性の絶対性というものが信じられなくなってきた。これから我々はどういう風に理性を考え、どのように使っていかないといけないか。理性というのは、合理的に考えることができる素晴らしい能力だというだけではなくて、理性は合理的にしか考えることができない、有限で不完全な能力なんだと、ちゃんとちゃんとの味の素で知る必要があります。理性は不完全なんだということをちゃんと知ることによって、我々は理性に支配されないで、人間が理性を支配して理性を使いこなして、生きていくという力を我々は回復することができるわけです。理性は合理的にしか考えることができないんだ。そこに限界があるんだ。**

**なぜ人間は理性を支配しないといけないなのかと言ったら、理性能力というのは人間の持っている能力の１つであって、理性が全てではない。人間の中には理性以外の素晴らしい能力がいっぱいあるんだ。命の中には潜在能力と言われるさまざまな素晴らしい能力がいっぱい詰まっています。能力は理性だけではない。理性能力は人間の持っている能力の１つに過ぎないんだ。しかも理性能力というのは、人間が持っている肉体である脳に限定された能力である。だから、理性能力は人間の持っている能力の１つに過ぎないんだから、人間は理性に支配されてはならないのであって、人間は理性を使いこなして、支配して生きていかなければならない。理性よりも人間の方が素晴らしい。確かに人間も理性を持っていますけど、人間は理性だけではなくて感性もあり肉体もある。人間は理性のような単純な単次元の単純な存在ではない。より複雑でより高次元、高度な存在なんだ。理性はあるけど感性は肉体もある。人間よりも高次元の存在なんだ。人間よりも複雑な存在なんだ。そのようにしないと、人間らしい生き方ができない。**

**人間が理性を支配して生きていくのはどういうことなのか。現在のところ、人類は考え方が違ったら一緒にやっていけない、同じ価値でなかったら一緒に仕事ができないと思っている…それは、真理は１つだという理性に支配されているから。理性に支配されてしまった人間は、考え方が違ったらやっていけないんですよ。宗教が違ったら喧嘩して戦争して殺してしまうんですよ。価値観が違ったら排除し合うんですよ。一緒にやっていけないといって相手を除外するんですよ。それが理性に支配された人間です。**

**人間が理性を支配したらどうなるかと言ったら、考え方の違う人とどうしたら一緒に仲良くやっていけるか、ということを理性で考えて、「こうしてみたらどうだろう」「ああしてみたらどうだろう」と考えるんです。それが心遣いなんですよ。理性を手段能力に使って考え始めたとき、血の通った温かな心ができ始める。そういう状態が、人間が理性を支配しているという人間らしい生き方の状態・姿なんです。とにかく理性に支配されたら人間同士は対立をして、戦争したり殺し合う。人間が理性を支配して、理性を手段能力に使って、人間が人間らしく血の通った温かな心を持ち始めたとき、人間が人間らしい人間性を持った生き方ができる。理性を手段能力として使うということを我々はこれから覚えていかなければならない。そういう段階にこれから人類は入るわけです。**

**理性は合理的にしか考えることができない有限で不完全な能力だということを、ぜひ覚えておいてください。そして自分がどんなに正しいと思っても、それは不完全だ、完全ではないんだ、有限なんだと。決して自分の考えは間違っているんではない。理性で考えたことは正しいんですけど、絶対ではないんですよ。限界があるんですよ。だから自分と違った考えに出会った場合には、自分の考えは絶対ではないんだから、自分と違った考えに出会った場合には、違った考えから何かを学んで、自分の考えをより良い考え方に成長させるということを考えなければならない。それが血の通った温かな心なんです。自分の敵から学んで、そして自分の考えを成長させて、そして敵に対して「君と出会えて良かった。君と出会えて、君からこれを僕は学ぶことができて、こんなことに気づいて僕はこんなに成長できた。ありがとう」と言える。そこに人間的な血の通った温かな心の美しい姿があります。**

**なぜ自分と敵対する考え方が出てくるのか。それは宇宙の摂理なんですよ。宇宙の摂理というのは必ず対立するものがあって、バランスを取るという構造にはなっているんですよ。なぜ自分と真っ向から対立する考え方が出てきてしまうのか。それは自分の敵の考え方というのは、自分の考えにおいて欠落している部分を補うために出てくるという構造になっているんです。必ず現実の社会というのは、「自分はこうだ」と言ったら、必ず「いや、そうではない」というものが真っ向から対立する人間が出てくるんですよ。必然的に出てくる。それと違う考え方を呼び出すんですよ。つくり出すんですよ。その自分に敵対してくる考え方というのは一体何なのかと言ったら、自分の考えの欠落している部分、足らないところを補うために違う考え方が出てくる構造に、宇宙というか世界はなっているんですよ。それが対存在。表には裏があって、善に悪があって、真には偽があって、プラスにはマイナスがあって、陰には陽があって…という対という構造で宇宙が成り立っている。それは必然的に出てくるんだから、困ったことではない。自分の考えにおいて欠落している、欠けているところを教えてくれるために出てきてくれているんだから、我々は敵の考え方から何かを学んで、自分の考え方をより良く考えて、成長させるということをお互いにしなければならない。そういう生き方を命の通った温かな心を持った人間対応というんですよ。**

**同じ考え方の人間と付き合っていると楽しいけれども、成長はしないんですよ。成長しようと思ったら、自分と違う考え方の人と付き合って、自分にないものを相手から学んで成長する。これが成長の基本原理です。もっともっと自分と違った考え方の人から学んで成長させていく生き方を覚えていかなければならない。同じ考え方の人間とばっかり付き合っていたのでは、成長しません。自分と対立する相手は自分に欠落した部分を持ってくれているんだ。相手から学なないと自分は成長できないんだ。敵から学ぶ、相手を理解する。相手のことをちゃんと分かるという自分に成長できる。これが離婚の激増を食い止める方法なんですよ。真理は１つだと思っている分には離婚の激増は止まりませんよ。幼児への虐待はなくなりません。宗教戦争はなくなりません。本当に違うから殺し合うという状態を脱却していこうと思ったら、敵から学ばないと人間は成長できない。同じ考え方の人間ばかりといたら成長できない。この原理をちゃんと本当に分からないと、平和な社会なんて訪れるはずがありません。その意味においても、もっともっと我々は理性的に謙虚にならないといけない。どんなに正しいと思ってもそれは完全ではない、絶対ではない、不完全なんだ。間違ってはいないけども、完全ではないんだ。だから自分の敵の考え方から何かを学んで、自分を成長させるという気持ちにならないと、皆と仲良くやっていくということはできないんだ。**

**これからは個性の時代ですから、考え方が違ってもいい、感じ方も宗教も立場も違ってもいいというのが個性の時代ですから。いろんな考え方があってもいいんだ、ということが前提の個性の時代を生きていこうと思ったら、同じ考え方の人しか好きになれないという理性に支配された人間性ではダメなんですよ。自分の敵に感謝をすることができるようにならないといけない。なかなかそこまで行き着くには時間がかかるでしょうけど、そういう生き方ができて初めて離婚の激増は止まります。幼児への虐待も防げます。宗教戦争を乗り越えていく力も人類に出てくることになります。是非自分の幸せのためにも、人を責めたり対立する状況ではなくて、敵から学んで自分を成長させる人間性・能力というものを自分のものにする努力を、これからしてもらいたいと思います。そうすれば会社も本当に自分が成長できる場としての価値を持ってきます。そして会社の団結力というものも強まってくると思います。**

**とにかく人生の舞台である社会を生き抜いていくために、最初に求められるものが、他人から信頼され信用されること。他人から信頼され信用されるためには、自信と謙虚さを自分のものにしていく努力をまずはしなければならない。**

**次は第２番目、「自分で自分を教育する」。人に教えてもらったり、助けてもらったりしている間は、他人につくられた自分だ。本当の自分ではない。本当に自分らしい自分、自分の気に入った自分というのは、自分で自分をさせていく。自分で自分を教育する。そういう意識がなかったら、本当の自分にはなれないということです。自分の気に入った自分は、自分でしかつくれない。本当の自分になるには、大事な原理が３つあります。本当の自分になろうと思ったら、３つのことを考えなくてはならない。**

**まずは、理想を持つこと。他人に教えられるのではなくて、自分の命から湧いてくる理想を持つこと。理想・目標というものを自分で立てる。自分の人生の未来に理想・目標をちゃんと設定すること。だけど理想というものを頭で考えてはいけない。頭で考えた理想は自分の命を苦しめる。理想は欲求として持たないと実現できないし、欲求として持った理想でないと命は燃えない。欲求と結びつかないと理想は価値がない。なぜかと言ったら、頭で考えた理想というのは、多くの人が頭で考えて理想をつくるんですけど、だけど命から欲求が湧いてこないと行動力が出てこない。頭で考えただけの理想は、絵に描いた餅。頭で考えた理想を実現しようと思ったら、理性で自分の肉体に鞭を打って無理矢理に自分の肉体を動かさないと、その理想を実現するための努力ができないということになってしまうんです。辛い、苦しい努力なんだ。だけど命から欲求を湧いてくれば、人間は行動を止めないんですよ。湧いてこなくなると人間は行動を止めるんですよ。命から欲求が湧いてくる限り、人間は行動をし続ける。その欲求と理想が結びついたとき、理想は実現できて、しかも欲求としてその理想を追求する=したいことをすることになりますので、楽しい人生と言えます。欲求としての理想を持ったとき、命が喜ぶ生き方ができるということになってくるわけです。理想が実現するまで止められない、そういう生き方ができますから、だから欲求と理想が結びついたときに理想は実現されるんです。欲求は行動力。**

**理性でつくっただけの理想が欲求と結びつかないと、無理をして理想を実現する努力をしないといけない。苦しいし辛いんですよ。理性で計画をつくると、その計画を実現しようと思った瞬間から、計画に縛られてしまうんです。堅苦しい窮屈なつらい人生が始まる。だけど欲求として理想を持ったとき、したいことをするんですから、命を喜ばせられる。楽しい人生、生きがいのある人生、喜びになる人生、幸せな人生が始まるんです。理想と言えども、頭で考えるんではなくて命から湧いてくるものとして理想を持つことが大事なんです。**

**命から湧いてくる欲求として理想を持つにはどうしたら良いのかと言ったら、人間的に価値がある欲求というのは、理性を使って理性を手段能力に使わないとつくれません。どういう風にしたら、人間的な価値ある欲求というものをつくれるのか。また人間的な価値がある欲求と結びついた理想をつくれるのか。その方法論は、自分の理性を使って自分の命に問いを発するんですよ。どういう問いを発するのか。自分が自分に対して、どんな人間になりたいのか、どんな男になりたいのか、どんな女になりたいのか、どんな仕事がしたいのか、将来どんな生活がしたいのか、と。男性ならば「どんな男になりたいのか」と自分に問うて「自分はこんな男になってみたい」という欲求を引っ張り出すんです。本当に自分はこんな男になりたいという欲求が湧いてくれば、そういう男になれるように頑張ることが、その人の喜びであり、その人の命が燃える生き方になってくるわけです。本当にそうなりたいなら、そうなれるように努力をすることが喜びであるはずだ。どんなお父さんなりたいのか、どんなお母さんになりたいのか、どんな奥さんになりたいのか、どんな夫になりたいのか、どんな経営者になりたいのか、どんな建築家になりたいのか、そういうなりたい自分というものを自分の命から呼び覚まして引っ張り出してくる。本当になりたいと思ったら、その人は必ずそうなれる。欲求と結びつけば実現されるんですよ。欲求と結びつかない理想は実現されません。欲求と結びつくということは、理想を実現する行動力が伴ってくる。欲求が湧いてくれば行動し続けるんですから。欲求と結びつかないと理想は実現できません。本当にそうなりたいのか、本当にそうしたいのか、ということを自分に問う。本当にこうしたいと思ったら必ずそれは実現できます。とにかく自分で自分を教育しようと思ったら、命から湧いてくる欲求としての理想を持つこと。欲求としての志、目標を持つこと。これが自分で自分を教育する第１原理です。**

**第２番目は、問題意識を持つこと。自分の命から湧いてくる問題意識を持つことです。仕事をしておりながら、「なんかここのところもうちょっと便利にならないかな」とか「なんかここのところ何か納得できないな」「なんここのところもうちょっと何とかならないのか」という命から湧いてくる問い、それが自分を成長させてくれる。他人から与えられた問題を解いている分には、理性しか成長しません。だけど命から湧いてくる問題意識を解くために自分の理性を使い、理性で答えを与えると、その答えは命に染み込んでいきますので理性を成長させるだけではなく、人間性も成長させる。だけど他人から与えられた問題を解いている分には、理性しか成長しない。人間性は成長しない。自分の命から湧いてくる問題を解くことによって人間は成長する。自分で自分を教育しようと思ったら、問題意識が大事。問題意識のない人間は自分で自分を成長させるようなことをしません。問題がなかったら何もしなくてもいいということになってしまう。問題があって初めて人間は努力をしますので、命から問題意識が湧いてくるということが、人間が努力する原因、きっかけになります。自分が成長できるきっかけになるわけです。**

**３つ目の自分で自分をよくする原理は、人間としてもっともっと成長したいという思い。つまり、人格を磨くという努力をしなければならない。人間の格を成長させる努力をしなければならない。人間として成長するとはどういうことなのか。これは能力の成長と人間性の成長の両面があるわけですが、能力を成長させることは潜在能力を引っ張り出して、そして今までできなかった問題が解けるということ。人間性の成長というのは、人格を磨く。人格というのは人格の高さ、深さ、大きさという３つの原理があります。人格の高さを求めていく、深さを求めていく、大きさを求めていく努力をすると、人間性が成長することになってくる。人間としてもっともっと成長したいという意欲がなかったら、自分で自分を教育することはできません。人格の高さ、深さ、大きさをつくるためにはどうするのか…これも別々にまた後日、時間を使ってお話をします。とにかく自分で自分を教育するためには、まずは理想を持つこと。そして、問題意識を持つこと。成長意欲を持つこと。自分で自分を教育するという生き方をするための基本原理であります。自分で自分を教育しようとしないと自分らしい自分、自分の気に入った自分、本当の自分になれないということをちゃんと押さえておいてもらいたいと思います。ここで休憩を挟み、後半にお話をしたいと思います。どうもありがとうございました。**

**それでは後半の話に入ります。**

**次は第３原則です。人生の鉄則。これだけは絶対に外してはならないという、成功と幸せを手に入れるための基本的な生き方ですけど、第３番目は限界への挑戦。これは人間は成長するということは、基本的には今の自分にとってできないことをできるようにしていくというのが成長の原理です。だから成長するということは、一瞬一瞬が今自分の持っている力の限界への挑戦という意味合いを持っています。今自分ができることしかしようとしない、今の自分の持っている力でできないことは「できません」といって断ってしまうという状態では成長はありえませんし、また今よりも幸せになるようなことも不可能であります。今よりも幸せになり、今よりもより素晴らしい仕事をしていくことを考えたならば、どうしても今より大きな力をつくっていくということをする努力をしないといけません。それを一言で言ったら限界への挑戦ということができるわけです。しかし、限界への挑戦は非常に苦しい。今できないことをできるようにするのは非常に苦しい。だから、ついつい我々は易きに流れてしまい、今自分の持っている力でできることでなんとかやっていこうと思って、今自分の力でできないことをできるにしていく意識的な努力というのはあまりしない人が多いです。無理矢理に、強制的にさせられて教育を受けて、そういうことをさせられてしまうという形で成長することはあっても、自分自身で自分の能力の限界に挑戦して、そして自分の望むところの幸せと成功を手に入れるという生き方をしようと思ったならば、自分自身で今自分の持っている力の限界に挑戦するということをする必要があるわけです。**

**限界への挑戦という生き方をしていく上で一番大事な人生の教訓というのは、逃げたらいけないということです。会社の中ではいろんな人間関係の問題とか、いろいろ仕事上の問題が出てきます。問題はなぜ出てくるのかと言ったら、問題というのは自分を成長させるために出てきてくれているもの。確かに問題や悩みは嫌なものですけども、嫌なものだとマイナスに評価するのではなくて、問題や悩みがなかったら人間は成長しない、問題や悩みがなかったら何もしなくて良いということになりますから。人間は成長しない。出てくるということは、自分を成長させるために出てくるんだ、と。必ず自分を成長させるために出てきてくれている問題なんだ。という理解の仕方をするということが、成功と幸せを手に入れる人間のタイプになるという道筋なんです。問題や悩みは自分を成長させるために出てきてくれているんだ。**

**実際問題、社会においても犯罪や事故が起こるわけなんですけど。犯罪や事故ももちろん起こらない方が良いんですけど、だけど必ず事故と犯罪は起こるんです。なぜなら、社会を発展させるため。事故もない、犯罪もなかったら、社会は停滞する。そういう意味で、不都合なことではありますけど、だけども事故も犯罪も必ず起こることになっている。それは社会そのものが不完全だから。あらゆるものは不完全だから。だから機械も故障するし、また人間も不完全だからいろんな過ちに陥ってしまう。人間は「もう二度とこんなことがあってはならない」そう思い、問題が起こらないように「どうしたら良いのか」ということでいろいろと考えて、努力して頑張る。そのことによって社会は動いていって、あらゆるものがより良い方向性に成長していくということにもなってくるわけであります。自分の身の回りに起こる、降りかかる問題や悩みというのは、全て自分を成長させるために出てきてくれているんだ。自分を成長させるために出てきてくれているものだから、逃げてどうするんだ。そういう気持ちをまずは、我々は持って仕事に臨まなければならないし、また日常生活においてもそういう気持ちを持っている必要があります。「逃げたらいけない」というものがすごく大事な人生を生きる教訓になってくるわけです。**

**だけども人間は不完全ですから、どんな問題からでも「逃げたらいけない」と言ったら苦しくなります。だから人生には「逃げなければならない問題」もあるし、また「逃げてもいい問題」もある。だけども基本的なことを言ったら、自分が自分の意志と決断で選び取った人生の道筋から出てくる問題と悩みというのは、これは自分が選んだ道が出てくる問題なんだから、そこから逃げるのは人間として卑怯だ。自分が選んだ道から出てくる問題や悩みは、他の人に代わってもらうわけにいかないもの。だから自分が選んだ道から出てくる問題だけは、基本的に「逃げたらいけない」という気構えで、問題に立ち向かっていくということをする必要がある。**

**特に自分が選んだ道から出てくる問題というのは、「君がこの道で成功し、幸せになりたいと思ったならば、こういう問題を乗り越えていく力をつくれよ」と、自分に教えてくれるために出てきてくれている。それが自分が選んだ道が出てくる問題や悩みの意味なんですよ。実際問題、今自分が歩いている道から出てくる問題を乗り越えられなかったら、その人はもうその道では絶対に成功はできませんし、またその道で幸せになっていくことは不可能であります。今自分が選んで歩いている道から出てくるさまざまな人間関係の問題も仕事上の問題も、すべて自分をより素晴らしい人間に成長させてくれるために、天が与えてくれた課題だ、問題だ。そう考えていく必要があります。**

**とは言え、限界への挑戦、問題を乗り越える努力というのは辛いものですから、ついつい逃げたくなってしまう、というか避けて通りたい。できることならば、そういう問題は避けて通りたいと思ってしまう。では、どういう風にしたら「逃げない」という気持ちを自分の中でしっかりと強いものにしていくことができるか。努力していても、なかなか良い結果が出ないと、ついつい「これだけ頑張っているのに、なかなか答えが出てこない。道が見えてこない。もうこれは自分はダメなんだ」と絶望したり、あるいは止めてしまうということになってしまう人が多いんですけど、だけどスポーツでよく言われるように、「練習は不可能を可能にする」という言葉があるわけです。どんなことでも何回でも、何回でも同じことをやっていたら、必ず問題をクリアできる力が自然にできてくるんだ、ということで、「練習が不可能を可能にする」。そういうこともよく言われます。**

**また昔から言われている言葉で、「夜明け前が一番暗い」ということもあるんです。「もうもうだめ」「もういけない」と思ったそこがどん底であって、もうちょっと頑張っていたら日がさすというも人生にはよくあります。だけどほとんどの人が「もうダメだ」と思ってしまったら、そこでやめてしまうんです。もうちょっと頑張ったら…。そうすれば、そこから抜け出せることができたのに。「そこでやめてしまうんだもの」というところがあるわけですよ。マラソンなんかでも、42.195kmの35kmあたりが一番苦しいところで、そこで皆潰れてしまう。一番苦しいところ、皆苦しい、だから、そこで頑張らないと勝てない。もうひと頑張りというところで頑張って、集団を抜け出してトップに立つという根性を見せるということがあるわけですけども。そういうことが人生にはよくあるわけです。**

**これは、今自分の持っている力を伸ばしていくというのは、潜在能力が出てこないと自分の力は伸びていかないんです。では、潜在能力とはどういう風にして出てくるのか。知恵や気付きで能力が湧いてくるということになるんですけど。それはどういうことなのかと言ったら、大きな問題にぶつかって、「今自分の持っている力ではどうしようもない」しかし、「このままでは終われない。このままくたばってなるものか」と思って、いろんな悩みに直面して頑張っていると、どうなるかと言ったら、命には命を生かす力が常に働いているんですよ。我々は寝ていても死なない、ということは、命というのは自分の力で生かしているのではなくて、命を生かす力は母なる宇宙の愛の力だ。宇宙の摂理の力。宇宙というものが命をつくったわけで、命の中には宇宙の摂理の力という力が常に働いています。だから我々は寝ていても死なない。その命を生かす力は愛の力なんです。そして人間は、生まれながらに潜在能力をたくさん与えられて生まれてくるわけですよ。すなわち、人間として生きていくためには、これだけの能力が必要なんだということで生まれながらに潜在能力というものが、ちゃんとたくさん与えられて生まれてくる。生まれながらに与えられた潜在能力を人生の中でどれだけ引っ張り出すか、顕現させるかということが、人生のレベル、素晴らしい人生になるかどうかを決めることになるわけです。**

**そういう潜在能力というのは、どういう風にして出てくるのかと言ったら、今自分の持っている力で何ともならない…だけど何とかしたいと思って頑張っていると、潜在する能力が出てくるという順番になるわけです。だから潜在能力というものを引き出して自分がより高度の力を持つ状態に成長していこうと思ったならば、今自分の持っている力でなんともならないという状態になったときに諦めず、「何とかしたい」「このままでくたばってなるものか」と頑張っていると、今自分の持っている力でなんともならないのだからということで、潜在する能力が出てくる順番がきて、そして潜在能力の顕現という形で知恵が湧いてきたり、気付きが湧いてきたりして、そしてより高度な能力を獲得することができる状態になるわけです。**

**なぜそういうことをしていると知恵が湧いてくるのか、気付きが湧いてくるのか。それは問題や悩みにぶつかって苦しんで、どうしようも状態で、「だけど何とかしたい」と頑張っていると、苦しいという状態でもがいているということは、命においてはマイナスの力が働いていますので、命には常に命を生かす力、母なる宇宙の愛の力が働いています。だから、命がだんだんと「もうだめだ」と思うような気持ちになって苦しんでいると、そうすると命を生かす力というものが「何とかしてあげたい」と愛の力となって働き始める。潜在能力というのは、人間が人生を生きていくために与えられた力だ。その人間が大きな問題にぶつかって苦しんで、「何とかしたい」ともがいていると、命を活かす力である宇宙の力が目覚めてきて、そして「君が問題を乗り越えるには、潜在能力が必要なんだよ」ということで、母なる宇宙の愛の力が潜在能力を引っ張り出してくれて、問題を乗り越えさせてくれるという構造に命はなっているんですよ。自分が何ともならない状況になり、頑張っていると、母なる宇宙の愛の力、母性愛がくすぐられる。「何とかしてあげたい」と、お母さんが守ってくれちゃったりするわけです。自分が苦しんでいると、そうすると命を生かす力が目覚めてきて、そして「なんとかしてあげたい」という愛の力に変わっていく。愛の力が潜在能力を引き出してくれて、問題を乗り越えさせてくれることになってくわけです。でも自分の必死の努力が、何とかしてあげたいという思いになる。お母さん・母なる宇宙が「何とかしてあげたい」と思い、潜在能力が出てくるという状態するには、本当に頑張って「何とかしたい」と本気で努力するということをしない、お母さんの「助けてあげたい」という気持ちを誘発することはできない。**

**どういう状態でお母さんが「助けてあげたい」という思いになってくれるか。それは、「もう今自分の持っている力ではどうしようもない」という切羽詰った状況で、いわゆるどん底という状態に陥って、なおかつ頑張っていると、「何とかしてあげたい」という母性愛が出てくるんですよ。そういう状態が、「夜明け前が一番暗い」という状態で、本当にどうしようもないという状態に陥って、ほとんどの人がそこで「もうダメだ」と思って諦めてしまうところを「何とかしたい」と思って頑張っていると、そこでお母さんが「何とかしてあげたい」と思ってくれちゃったりなんかして、潜在能力に気付かせてくれて、顕現させてくれて、問題を乗り越えさせてくれる。というのが、知恵が湧いてくるという状態の命の働き、命の状態、命の構造なんです。「もうだめだ」と思うところで止めないで、だけど「このままでくたばってなるものか」と思っていると、お母さんが「何とかしてあげたい」と思ってくれる。こういうことが命の持っている理屈を超えた働きなんですよ。**

**NHKの「プロジェクトX」、不可能を可能にした男たちのドラマというのは、いっぱい展開されましたけども、あの不可能を可能にした男たちのドラマ、あれもやはりもうどうしようもないような状況に追い詰められてしまって、普通ならもう諦めて止めてしまうところを「自分たちを馬鹿にしたやつを見返してやる」「このままではくたばれない」と言って頑張っている。その頑張りが不可思議な気付きを命から湧き出させてくれて、問題を乗り越えていくドラマが生まれてくるわけであります。あれが命を生かす愛の力というものを自分の苦しみが目覚めさせて、そして「なんとかしてあげたい」という力に変えていく。宇宙の愛の力が働き始めると、潜在能力、生まれながらに与えられている力が引っ張り出される。そういうことがちゃんと分かっていると、もうどうしようもないところで投げ出さないで、もうちょっと頑張れるという力も湧いてくるんではないかと思うんですが、ほとんどの人がもうどうしようもないというどん底で絶望がして、諦めて投げ出してしまうんです。**

**とにかく、限界への挑戦という努力をすることによってしか、本当の自分の底力は湧いてこない。よく火事場の馬鹿力というのは言われますけど、「自分が何とかするしかない」と思うと、本当に普通では考えられないような力が湧いてきて、普通では持てないような金庫を持って走ったとか、そんなことはできるかどうか知りませんけど、とにかく不可思議な力が湧いてきて、状況を突破させてくれる。ということはよく人生にはある話であります。「もうダメだ」と思ったところをもう一歩頑張れるかどうかで人生は決まる。そんなことも、やはり人生を生きる力をつくっていくためには考えておかなければならない、大きな課題であります。ほとんどの人は止めてしまい、そして平凡な人生で終わってしまうんですよ。だけど存在感のある素晴らしい人生を手に入れる人は、そこから頑張るんですよ。今自分の持っている力でなんともならないというところから頑張る、というのが本当の素晴らしい人生を手に入れるやり方です。**

**それはどういうことかと言ったら、今自分の持っている力というのは顕在能力と言って理性能力なんです。理性能力とは、他人がつくった知識や技術を学習して覚えて自分のものにしたものが理性能力の内容です。他人がつくった知識や技術をパクったんですよ。理性はパクリなんです。だけど他人がつくった知識や技術を学習して覚えて、そして自分の力だと思って使っている力が役に立たなくなってきて、今自分の持っている理性能力ではなんともならないと状況になって、そしてだけどなんとかしないといけない…と頑張っていると、自分の命から潜在能力が湧いてくる。自分の命から湧いてきているのだから、それこそまさに自分の力と言えます。本当に自分の力で生きる人生が始まるんですよ。理性で生きている間はパクリの人生だ。他人の力を、他人がつくった知識や技術を自分のものだと思い込んで使っている。力を借りた人生。だけど本当に自分の力で生きる人生は、他人から借りたのが役に立たなくなってきて、自分の命から知恵や気付きが湧いてくる…そこから本当に自分の力で生きるという人生が始まるんだ。だから、個性のあるオンリーワンの素晴らしい人生が始まって、その人独特の人生が出てくる。能力も個性がある、そういう人間になれる。自分の命から湧いてきたのですから、それこそまさに自分の力と言えます。理性で生き、理性で仕事をしているうちは、まだ借り物の人生だ。パクリの人生だ。そういうことも生き方として覚えておいてもらいたいと思います。**

**実際問題、私なんかでも、なぜこうして多くの人の前に立ってお話をできるような力を持った人間になれたのか。人生を振り返れば、「あのときあの問題から逃げなかったことか」ということが、たくさん出てきます。「あのときあの問題から逃げていたら、今の自分はないな」ということがたくさんあります。だけど、辛かったけどもなんとか逃げないで問題を乗り越えた。そのことによって、自分の底力が湧いてきて、他人から学んだことをしゃべるのではなくて、自分の命が湧いてきた力でいろんなことが喋れる。だからそれは自分の力ですからいくらでも応用が利きます。だから何にも見ないでこのように面と向かって喋れるわけですよ。他人がつくった知識や技術を勉強して喋っている大学の先生は、ノートを見ながらしかしゃべれませんけど、だけど自分の命から湧いてくる力というのは、他人から学んだものではないから自分の力だから何も見なくても湧いてくるから喋れるわけですよ。ここにオンリーワンという個性のある能力というものの素晴らしさがあるわけであります。本当に自分の人生というのを生きていこうと思ったら、命から知恵や気付きが湧いてくるという構造を命につくらないといけない。そうすることによって他の人には歩めない自分独自の人生というものがつくれるわけであります。これが限界への挑戦という生き方が持っている凄さです。これも本当に個性の時代を生きる、本当に個性ある存在感ある能力を持って人生を生きていくということになるためには、どうしても必要な原理です。限界への挑戦。ぜひそういう生き方も覚えておいてもらいたいと思います。**

**次は第４番目です。第４番目は、決断にかける。これはどういうことなのかというと、人間が生きるということは一瞬一瞬が、いろいろな可能性があるわけですよ。いろいろ可能性がある中で、何を選び取っていくか。それが人生を生きるということの基本なんですよ。生きるということは、多くの可能性の中からある１つの存在、未来を選び取るという決断に人生はかかっている。人生はまさに決断の連続である。一瞬一瞬に多くの可能性がある。多くの可能性の中から何を選び取って生きていくか。それが人生の生きる基本原理ですよ。人生とは決断の連続である。今日はセミナーに参加することもできたけども、参加していないこともできたし、会社を休むこともできたかもしれないし、どこか恋人と遊びに行くこともできたかもしれない。そのようにいろいろと可能性はあるわけですけど、その中で「今日はセミナーに参加するということにした」という、これも決断。強制的にそうさせられている人もいるかもしれませんけど、多くの可能性があってその中の何かを選び取るということをする、それが人生というものの基本的な姿です。そういう意味では、人生というのは決断の連続であると言うことができる。**

**決断とはなんなのか。これは人生の課題になってくるんです。決断とは何かを選び取ることだと普通は考えています。辞書には書いてあります。決断とは、多くの可能性の中から何か１つのものを選び取ること。ある１つの存在、未来を選び取るということをするだけでは、決断の中の決めるということだけにすぎない。大事なことは何を断つのか。断とは何かをちゃんとちゃんとの味の素で知らないと、本当の人生を生きる力は湧いてこない。多くの人が、決断とは言いながらもある１つのものを選び取る、いろいろ考えて「これが一番良い道だろう」と思って生きていくというのが、普通の人の人生なんですよ。だけど決断というものをただ選び取るだけで生きてしまったらどうなるか。必ず人間も不完全だし、人生も不完全だ。だからどんなに素晴らしい道を選び取ったとしても、必ず人生は不完全だから問題と悩みが出てくるんですよ。**

**就職も決断だし、結婚も決断だ。決断して決めただけでいってしまうとどうなるか。「この会社に入ったから、こんな嫌な奴に出逢って、こんな問題が出てきちゃったんだ。ひょっとしてこの会社に入らないで、違う会社に就職していたらこんなことにはならなかったのに」。これが決めただけでいってしまった人生の迷いなんです。人間の人生は不完全ですから、また社会も不完全で、あらゆるものも不完全ですから、どんなに素晴らしい道を選んでも必ず問題と悩みは何か出てくるんですよ。問題の出てこない道はない。問題と悩みの出てこない結婚、就職はない。どの会社に就職しても、どの人と結婚しても自分が不完全であるが故の問題だけは必ず出てくる。自分が不完全だということ、これはもうどうしようもない宿命ですから。だから自分が不完全である限り、どの会社に就職しても誰と結婚しても、必ず自分が不完全であるが故の問題だけは出てこなければならない、出てきてしまう。だけども決断というものをただ決めただけでいってしまうと、ほとんどの人がどうなるかと言えば、決断するときにはいろいろ考えてこれが一番良いと思って決断して選び取るわけなので、良いと思って選んだのにその道を歩んでいたら問題が出てくる。そうすると、「ああ失敗したな。この道を選んだからこんな問題が出てきた」「こんな人と結婚したからこんな問題が出てきた。ひょっとしてあちらの人と結婚していたならば、こんなも問題は出てこなかったのかな。失敗したな」と、思うんです。一瞬不幸になるわけですよ。これは理性によって完全性を求めるが故の迷いという人生の姿。理性的に人生を考えると、問題が出てくると「この道は間違えた」と判断する。理性で考えると、「上手に道を選んだならば、問題が出てこない素晴らしい道があるはずなんだ」と思う。だから問題が出てくるたびに失敗したと思うんですよ。だけど人間は不完全ですから、だから理性で考える人生はないんですよ。完全な人生はないんですよ。不完全だから、どんな道を選んでも、誰と結婚しても必ず問題と悩みだけは出てくるんですよ。だけど、このことをあまり考えないでほとんどの人は問題が出てくると、「この道を選んだから、この人と結婚したから、こんな問題が出てきちゃったんだ」と、不幸になるわけです。ひょっとしたらあちらの方がと思った瞬間に、自分の意識は分散しますから、だから今自分が選んだものに自分の全情熱を傾けるという生き方ができない。だからやることが全部半端になってしまう。だから自分が選んだ道、選んだ人にも自分の情熱を注げないから、相手をも不幸にしてしまう。そして意識が分散して集中力がある努力ができないから、やることは全部半端になってしまって平凡な人生で終わってしまう。これがほとんどの人の人生の道筋なんですよ。**

**だけど、本当に人生の幸せと成功を確実に手に入れる人は、どういう生き方をするかと言ったら、決断というものを単に選び取るということだけで終わらない。本当に成功する人は、どういうやり方をするか言ったら、「あるものを選び取ったならば、そのとき自分がやらなかったもの中にどんなに素晴らしいものがあったとしても、あるものを選んだならば、自分が選び取らなかったものの中にどんなに素晴らしいものがあったとしても、他のものへの思いを断ち切る。逃げ道を塞ぐ。退路を断つ。自分にはこの道しかない。自分にはこれしかないんだ」という意識に自分をしてしまう。このことを断つ、と言います。何を断つのか、それは他のものへの思いを断ち切るんです。結婚したら、「もう自分にはこいつしかいない」と、他の者への思いを断ち切る。だから、その人と結婚してどんな問題が出てこようとも「自分にはこいつしかいない」のだから、「出てくる問題をバカになって潰しに乗り越えるしか自分の人生はないんだ」と腹が決まったとき、確実にその人は大成功の人生を手に入れることができるわけですよ。なぜかと言ったら、成功した人は問題を乗り越え続けた人だけなんだ。自分が選んだ人生から出てくる問題を乗り越えられなかった人は、成功できないかそれ以上前へ進めませんから平凡な人生で終わってしまう。成功した人は問題を乗り越えた人だけ。乗り越えられなかった人は、今の自分の持っている力以上のものを手に入れることはできない平凡な人生で終わってしまう。**

**就職したからには、結婚したからには、「ひょっとしたら…」と思ったらもう負けなんだということを本当に知らないと、悔いのない人生というのはありませんし、本当の成功と幸せは手に入りませんよ。この会社に入ったからには、「もう自分はこの会社にかけたんだ。もうこの会社に入った限りは、この会社から出てくる問題や悩みを乗り越えていくしかない」と思ったとき、必ずその会社で大出世しますよ。必ずなくてはならない人物になれますよ。「お前だけはとにかくいてもらわないと困る」と言われる人間になりますよ。だけどこの会社に入ってこの会社から出てくる問題を不都合だと思い、「ひょっとして、あちらの会社に就職していたらこんな問題、こんなやつとは出会わなかったのに」と思い始めたら、もうその人は成功と幸せは手放したというか、手に入らない平凡な普通の人生で終わってしまいます。成功するということは、問題を乗り**

**越え続けるしかないんです。だから問題を乗り越えられなかったら、そこでつまずく。**

**とにかく、家庭生活においても「どんな問題が出てこようと自分はこいつにかけたんだから、自分がなんとかなんとかするしかない」といって生きていかなければならないのが、家庭生活ですよ。それをいちいち「これはお前の問題」のように問題の振り分けをしているようでは、能力が伸びません。どんな問題が出てこようとも、相手から「どうしたら良いかな」と相談をされたら、「自分がなんとかする。心配をするな」といって、乗り越えていく。そのことによって自分の潜在能力がどんどん出てきて、そしてどんな問題でも乗り越えていけるという人間になれるわけですよ。とにかく問題というのは、自分の潜在能力を引き出すために出てくるんですから、だから問題というのは潜在能力とタイアップしているんですよ、リンクしているんですよ。乗り越えられない問題はないんですよ。どんな問題でも乗り越えられる。**

**人生には、わずか500万円の借金で首を吊って死んでしまう人もいるんです。だけど、500億円の借金でも一代で返してしまう人間もいるんですよ。どこが違うのか。それはどこで「もうダメだ」と思うか。500万円でももうダメだと思ったら返せないんですよ。だけど、500億円でも「このままくたばってなるものか。まだ終わらんぞ」という気持ちがあったら、潜在能力がどんどん出ていきて、そして不可思議な力が湧いてきて、不可思議ないろんな助けが周りから与えられて、問題を乗り越えさせてくれるという状況が生まれるんです。どんな問題でも人間の命の可能性からいって乗り越えられない問題はないんですよ。問題は全部、潜在能力を引き出すために出てくる。社会を発展させるために出てくる。人間を成長させるために出てくる。会社を発展させるために問題が出てくるんだ。問題は不都合ではない、出てこなかったら発展しないんだ。問題は幸運なんだ。どうしたら会社が発展するのかを問題が教えてくれるんだ。逃げないで問題を乗り越えていくための努力を皆が頑張ってやったら、必ず会社は発展して時代の要請に応えることができる。問題に答えていくとは時代の要求に応えることなんですよ。時代の求めに応じて発展することなんですよ。**

**とにかく、決断にかけるということで大事なことは、どんな道を選んでも問題と悩みは出てくるんだ。自分の選んだ道から問題が出てきたときに、「この道を選んだからこんな問題が出てきたんだ」と思ってはいけない。どんな道を選んでも必ず問題と悩みは出てくるんだ。出てこない道はないんだ。だったら、「もうどうだって良い、となってしまうんではないか」と思われる方も多いと思うんですけど、だけど決断というのは、やはり「これが自分にとって最高の道だ」というものを選ばないと、“この道にかける”という気持ちになれません。だから決断するときには、「自分は最高の道を選び取った」「自分は最高の人と結婚した」と思っていないと、その人にかけられません。だから決断においては、十分に考えて、自分が持っている全ての力を振り絞って、最も素晴らしいと思える道を選ばないとダメです。だけど、どんな素晴らしい道を選んでも必ず問題と悩みは出てくるんだ、ということを知っていないといけない。どの道を選んでも問題と悩みは出てくるんだから、出てくる問題を虱潰しにバカになって乗り越えていく以外に本当の人生の生き方はないんだ、ということを理解する必要があります。人生は理屈では生きられないんですよ。とにかく理屈抜きにかけるしかない。人生は賭けだ。丁半賭博だ。賭けたからには他のことを考えていてはダメです。本当にそれに命をかけないと。そこに感動の人生が生まれてくる。腹が決まったとき、確実に悔いのない人生を手に入りますし、また幸せと成功は自分の手に入ったようなものなんですよ。それが成功の人生の基本です。人生というのはどの道を選ぶかで決まるんではないんだ。誰と結婚するかで決まるんではないんだ。どの会社に就職するかで人生は決まらない。人生は選んだ道から出てくる問題を乗り越え続ける努力をするかどうかで、決まるんだ。**

**多くの文化人が、どの道を選ぶかで人生は決まるんだと言っているんですよ。誰と結婚するかで人生は決まるんだと言っているんですよ。それは理性で考えた人生なんだ。理屈を超えた人生というのは、どの道を選び取るかという人間の力の範囲内の選択能力で人生は決まるんではない。人生には人知を超えた計らいが常に働いている。理屈を超えた生き方を覚えないと、本当の素晴らしい人生は手に入らない。理屈を超えるとは、理性でどれだけ考えても一寸先は闇だ。東大に入ったら幸せになるだろうと、一生懸命に勉強して入っても、卒業して出た途端に車で轢かれて死んでしまったら一巻の終わりですからね。「こんなことになるんだったら東大に入らなかったら良かった」と言っても後の祭りですからね。とは言え、他の大学に入っていたら車に轢かれないという保証もないわけですから。とにかく、人生一寸先は闇。とにかく、決めた道にかけるしかない、というのが人生の基本であります。理性だとどれだけ考えても、最高の道がなんなのか分からない。一寸先は闇だ。決めた道にかけるしかない、それが人生の基本ですよ。誰と結婚しても、どの会社に就職しても、自分が不完全なるが故に問題と悩みは自分が引き寄せるんだ。逃れられないんだ。どこにいってもやってくるんだ。それは誰と結婚してもどんな会社に入っても同じ。どれも自分を成長させてくれる問題や悩みなんですよ。問題と悩みは自分を成長させてくれる。潜在能力が引っ張り出されてくるんだ。どの道を選ぶかで人生は決まるのではない。人生は自分が選んだ道から出てくる問題を乗り越え続ける努力をするかしないか、それだけで決まるんだ。これが本当に分かって実践できたら、確実にその人は大成功の人生、大きな幸せを手に入れることができますよ。そして、「自分の人生に悔いはなかった」と言って死んでいける人間になれますよ。だけど、小賢しい理性で人生を生きようと思ったら、必ず悔いを残す。「こんなはずではなかった」という人生になってしまうんですよ。理性を捨てて、バカになって、出てくる問題を虱潰しに乗り越えていったら、素晴らしい人間的な人生を手に入れることができる。これが人生を賭けだ、という原則であります。**

**アサヒグローバルに就職したのも、ある意味で人智を超えた天の計らいでこの会社に結びついた。「もうこの会社から出てくる問題を乗り越え続けて生きる以外に自分の人生の本道はないんだ」というふうに思わないと、迷ったらもうその人の人生は終わりですよ。とにかく、人生は決断にかけるしかない。もっと素晴らしい道があるはずなんだと思ったら、それは迷い。自分が幸せになるために必要なものはもうすでに皆与えられているんですよ。このことは、チルチルミチルの青い鳥という寓話がありますけど、今の自分たちは幸せではないと思って、しかしどこかに幸せはあるはずなんだと思って、兄弟が幸せを求めて旅に出るんですよ。どこに行っても自分たちが求める幸せは手に入らなかった。ついに疲れ果てて家に帰ってきたら、命の中の籠の中に幸せの青い小鳥がいた、という結末で終わるんです。これは、「自分を本当に幸せにしてくれるもの、自分が幸せになるために必要なものは、すでに自分の手の中に与えられているのであって、それをないがしろにして大切にしないで、ないものに憧れて探し回ることは迷いだ」ということを教えてくれています。今自分の手の中にあるものを活かしきれば、最高の幸せを手に入れることができる。だけど今の自分は幸せはないと思って、幸せを求め始めたらかえって不幸になってしまう。今自分の手の中にあるものを大事にすることが一番大切なことだ。そのことを教えてくれているんだ。今自分の手の中にあるものを大事にする。そうすると、幸せの種は芽を出して花を開き始める。これも本当に素晴らしい人生を生き切るためには、絶対に忘れてはならない基本原理ですよ。人生は賭けだ、小賢しくあれこれ考えたら迷いだ。決断しなければならない。決断するとは、あるものを選び取ったならば、そのときに選び取らなかったものの中からどんなに素晴らしいものがあっても、あるものを選んだならば、他のものへの思いを断ち切る。捨てる勇気が決断だ。勇気のない人間は、人生を迷う。あるものを選んだならば、他のものへの思いを断ち切れなければならない。思いを残してはならない。これをかけるというんですよ。是非、悔いのない素晴らしい人生の生き方というものの基本原理を噛み締めてもらいたいと思います。**

**成功した人は問題を乗り越え続けた人だけなんだ。問題のないような道は成長できない道だ。問題の出てこないような道は成功できない。平凡な人生で終わってしまう。問題が出てくる道こそ、最高の道だ。発展する方向性がちゃんと示されている、最高の道が問題が出てくる道なんだ。実際、歴史も社会も会社も人間も皆、問題に導かれて成長するんだ。それが犯罪と事故はなくならないということの意味なんです。犯罪と事故がなくなったら、社会は停滞する。犯罪と事故があるから、「何とかしよう」と思って頑張って歴史はつくられる。それは成長するということ。**

**最後の第５番目は、意味と価値の確認。この作業を怠ってはならない。これは人間の本質は心です。けれども、心とは何なのか。心とは、意味と価値を感じる感性だ。心とは意味と価値を感じる完成だ。人間は意味を感じないとやる気にならない。価値や素晴らしさを感じないと命に火がつかない、燃えない。せっかく生まれてきたんですから「あのときは燃えたよな」と言って、肩を叩き合うような素晴らしい人生というのを何度か体験したいものだと。命が燃えるという状況になるためには、どうしても意味と価値を感じるということがなければならない。感じてこそ燃える。感じてこそ人生、燃えてこそ人生。命から湧いてくるものがあってこその人生。命から湧いてくるものがなければ、枯れすすきですから。命から湧いてくるものがあって、初めて命は燃えて生きがいと喜びが湧いてくる。だから我々は、どんなことをする場合でも今自分のやっていることの意味と価値と値打ちと素晴らしさがどこにあるのか、ということをちゃんと知りながら、それをするというクセをつけなければならない。意味を感じないで何かをするということは、意味のないことをしているんだ。価値や素晴らしさを感じないで何かをするということは、価値のない人生を生きているんだ。これでは成長・発展はおぼつかない。意味を感じ、価値を感じてこそ情熱を持ってある事柄に立ち向かっていくことができる。そこに素晴らしい、感動の人生が始まるわけであります。意味と価値を感じなければ、感動はない。命は燃えない。**

**そういう意味で、会社の中の業務でもどんなことをする場合でも、今自分がこれをしているということは会社全体にとってどういう意味を持つのか、どういう価値があるのか。なぜ今自分がことをしなければならないのか。もし自分このことをしなかったら会社全体はどうなるのか。ということを考えたら、どんな小さい作業でも今は自分がすることをしなかったら、会社全体の業務がストップするんですよ。それぐらいの重要な意味をどんな仕事でも会社というのは持っています。どれだけ自分のすることが会社の命を生かすか、会社にとって大事な意味を持つのか、ということを知りながら、「それほどに重大なことを自分はしているんだ」という思いを持って仕事をすることが大事です。また上司が部下に仕事を与える場合には、「なぜ君にこの仕事をしてもらいたいのか」「なぜ君ではなければダメなのか」「今君にやってもらう仕事は会社にとって、社会にとってどういう意味・値打ちがあるのか」ということをちゃんと説明して、意味を感じさせながら仕事をしてもらうマネジメントをしなければなりません。もちろん上司はそのことをする必要があるんだけど、仕事を与えられる部下も、自分自身で「今自分がやろうとしている、今やっている仕事には、どういう意味と価値と素晴らしさがあるのか」を自分で考えて、そしてやる気というものを自分の命から引き出す・していくのが、仕事をするということになります。仕事をするとは、意味を感じないで仕事をしていては、それは人間としての仕事ではなくて、機械の仕事になってしまう。人間は意味を感じてこそ人間。価値と意味と素晴らしさを感じてこそ人間。意味と価値を考えて、そして意味になることをする。価値のあることを仕事にするということが大事なんです。**

**意味と価値というのは決まっているのではなくて、どれだけでもより高度な意味があるし、どれだけでもより深い価値があるし、どれだけでもより大きな素晴らしさを我々は考えることができます。結局、自分がどの程度その仕事に打ち込めるかということは、どの程度、意味と価値を仕事に感じているかに比例するんですよ。自分が感じている意味以上の仕事はできません。その意味でも今自分がやっている仕事の意味と価値と値打ちと素晴らしさを追求していって、より高度な意味、より深い意味より、より大きな価値を自分が発見していく。あるいはその仕事の中に意味や価値を付け加えていく。そういう意識で仕事をしてかないと、自分自身の仕事の仕方に喜びが湧いてきません。仕事をする喜びというのは、仕事にどの程度の意味を感じているか。意味を感じてこそ喜べる。価値や素晴らしさを感じてこそ、情熱を込めることができる。意味と価値と値打ちと素晴らしさには限界がない。いくらでも上には上があり、より深い物事の理解の仕方というのがあるわけであります。仕事の意味と価値を感じるということの大切さということをぜひよく考えてもらいたい。**

**意味と価値は理性で考えないと出てこない。理性で意味を考えると、理性で考えた意味を感じる感性がだんだん成長してきて、そして感性が意味を感じたとき、命に火がつく、情熱が湧いてくる、欲求を湧いてくる。そういう構造が命にできる。意味と価値を感じないと、命から湧いてくるものが出てこないんですよ。意味と価値を感じないと、人生はつまらないわけですよ。仕事もつまらないわけですよ。「なぜこんなことしないといけないのか」ということで、本当にしらけたような生き方になってしまいます。しかし、人間の本質は心であって、心とは意味と価値を感じる感性だから、意味と価値を感じたとき、心・命は燃え始める。そして生きがいを感じ始める。やりがいを感じ始める。生きる喜びが湧いてくる。そういうことで仕事をする場合に今自分のやっていることの意味と価値と値打ちと素晴らしさを考えるクセをつけてもらいたい。そして意味を感じながら生きる。素晴らしさを感じながら何かをする。そういう自分というものをつくってもらいたいと思います。そうすれば、本当に幸せな仕事の仕方が自分でつくり出せると思います。**

**とにかく、人生の鉄則というのは申し上げた５項目あります。これは全部やらないといけないと思ったら大変ですので、全部やらないといけないというのではなくて、この５つのことが人生の鉄則だ、基本原理だということをちゃんと理解してもらって、何か問題があったら「どれを忘れているから自分は今ダメなのか」というように、自分の生き方を軌道修正するための指針として、これを使ってもらったら良いと思うんです。この５つは順番ではなくて、５つとも全部どれ一つ外すことのできない重要な生き方の基本原則ですので、是非、５つのことを頭に置きながらいろんな仕事に携わってもらいたいと思います。そのことによって、確実に素晴らしい人生、成功と幸せを手に入れることができる自分に成長することができると思います。**

**とにかく基本的には理想を持って生きる、人生の未来に目標を掲げながら生きる、このことが人間的な生き方の基本であります。動物というのは与えられた現実にどう対応するか、というも生き方しかできないんですけど、人間は与えられた現実をどう変えていくかに人間的と言われる人生の基本があります。まずは独自の理想・夢を描いてもらって、実現するにはどうしたら良いのかということで、この５つの原則を踏まえた生き方を実践してもらいたい。**

**ということで今日は、年頭にあたって人間の生き方の基本原理というお話しをさせてもらいました。今日の話はこれで終わりにします。どうもありがとうございました。**